

氏名(国籍)	金 ^{きん} 玉 ^{おっく} 英 ^{よん} (韓国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第1,985号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	日本語と韓国語の従属節および関係節のテンス・アスペクトの対照研究
主査	筑波大学教授 Ph.D. 草薙 裕
副査	筑波大学教授 高田 誠
副査	筑波大学教授 博士(文学) 湯澤 質 幸
副査	筑波大学助教授 坪井 美 樹
副査	筑波大学助教授 矢澤 真 人

論文の内容の要旨

本研究は従属節および関係節に現れるテンスとアスペクトに関して日本語と韓国語の対照研究を行うことを目的にし、特にそれぞれの節におけるテンスとアスペクトが動詞の種類によっていかなる意味を表すかを克明に分析している。対照分析の軸となる枠組みはテンスは絶対テンスの過去、現在、未来および相対テンスの前、同、後を、アスペクトは静態相、動態未完了相および動態完了相を用いている。

第1章では、金田一(1950, 1995)、鈴木(1957)、藤井(1966)、吉川(1973)、草薙(1983)を中心に主節におけるテンスとアスペクトの先行研究を考察し、研究の枠組みとして、動詞の分類ではアスペクト形式を中心にした金田一(1950)を、テンス・アスペクトでは相対テンスの概念を含む草薙(1983)を基本にしたものを用いることにしている。

第2章では、日本語の従属節および関係節のテンスとアスペクトの分析を行っている。1で「とき」、「瞬間」、「たび」、「間」、「うちに」、「まで」、などの表現および「前」、「同」、「後」を表す表現におけるテンスとアスペクトを、2で条件を表す従属節のテンスとアスペクトを3で関係節の中のテンスとアスペクトを金田一(1950)の分類にしたがった状態、瞬間、継続、第4の動詞の種類でいかなる意味を表すかを中心にして詳しく分析を行っている。そして、日本語の従属節では絶対テンスの「過去」、「現在」、「未来」より相対テンスの「前」、「同」、「後」が多く現れることを指摘するとともに、動詞の種類によって、異なるテンスやアスペクトの現れ方があることを明らかにしている。

第3章では、韓国語のテンスとアスペクトに関する、최현배(1935)、李南淳(1981)、黄병순(1987)、南基心・高永根(1993)などの先行研究の考察と動詞の分類および主節のテンスとアスペクトの整理を行っている。動詞の分類では、基本的に金田一(1959)をふまえた上、アスペクト形式의 고 있다と어 있다がつくかどうかの基準によってさらに細かく分類している。

第4章では、韓国語の従属節および関係節のテンスとアスペクトを考察している。まず時点、時間、前、同、後を表す従属節についてそれぞれ分析する。そして、条件をあらわす節ではテンスの対立がない「자」節のアスペクトを分析した後、テンスの対立がある、その他の節のテンスとアスペクトを考察している。最後に関係節に現れる形式のテンスとアスペクトを分析している。

第5章では第2章で行った日本語の分析の結果および第4章で行った韓国語の分析に基づき両言語の従属節および関係節におけるテンスとアスペクトの対照分析を行っている。

まず、時を表す従属節では、主節の動詞が継続動詞か状態動詞で、従属節が継続動詞のときのみ「ル」が相対テンスの「同」の意味に使われるが、韓国語の場合、主節の動詞の種類に関わらず、従属節が継続動詞なら対応する形が「同」になることなどを指摘している。

条件を表す従属節では、日本語が「なら」のみテンスの対立があるのに対して、韓国語では対立がないのが上記のひとつの形式のみで、他の形式はすべてテンスが分化している。また、テンスやアスペクトの観点からは両言語の条件の従属節の対応は非常に複雑であることを明らかにしている。

関係節では日本語がテンスとアスペクトの形式では主節と同じものが現れるのに対して、韓国語では関係節に現れるテンスの形式が主節の形式と異なるとともに形式の数も多く複雑な体系になっていること、さらに日本語の「テイル」に対応するアスペクトの形式が韓国語ではふたつあり、対応関係を複雑にしていることを明らかにしている。

最後の第6章では研究のまとめをしているが、テンスでは主節が絶対テンスとして働いているのに対し従属節や関係節では相対テンスとなることが多いことは、日本語も韓国語も同じであるが、動詞の種類による違いがふたつの言語で意味の違いとして現れること、とくに韓国語の関係節のテンスの形式とそれに伴う意味などが日本語と違うことなどを指摘している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

テンスやアスペクトのシステムは複雑であり、単にどの形式がどの意味を持つかというようなものではなく、同じ形式が文中の現れる場所によって、また用いられる動詞の種類によって、さらに共起する副詞によって、異なった意味を表すため、今までにも日本語に関する限り枚挙にいとまがないほどの研究がされてきた。一方、これに比べると日本語よりも複雑に見える韓国語のテンス、アスペクトの体系的な研究はそれほど多くなく、ましてや日本語と韓国語の対照研究は少ない。

本研究はそこに挑戦したところに意義があるといえよう。とくに対照研究を従属節と関係節に絞り、動詞の種類が異なれば同じ形式の意味がどう異なるかを徹底的に考察している。この現象は指摘されて久しいが、従属節や関係節での現象はこれほど徹底的には研究されてこなかった点で十分に学界に貢献するものと思われる。また、日本語の枠組みを是め込んだとはいえ、韓国語の従属節と関係節のテンスとアスペクトを体系的に記述したことも評価できる。

研究が膨大になるだろうが、副詞との共起や関係節の被修飾名詞の性格などの分析がないこと、「なにが」という考察に対して「なぜ」という考察が弱いところは惜しまれる。

しかし、そのことを考慮しても、本研究は、学位論文として水準に達していると認められる。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。